

武漢紀行



之 敬 井 玉

眼下に長江が横たわっている。黄土色の流れであるだけに、かえって悠々とした感じを受ける。今、私は法学部の佐藤幸夫教授と一緒に、今年（一九八五年）五月に再建された黄鶴楼の最上層に立って、長江大橋と武漢市街を眺めているのである。この新しい黄鶴楼に登った日本人としては、おそらく最も早い方になるだろう。

かつて黄鶴楼は、湖南省の岳陽楼、江西省の滕王閣と並べて「江南三大楼閣」と称ばれていたそうである。武昌は蛇山の麓の酒家に一道士が来て酒を求めた。主人辛氏が酒を与えること半歳、ある日、酒價に酬いるに道士は密柑の皮で壁に鶴をえがいた。その鶴が客の求めに応じてたおやかに舞い歌ったので、おかげで巨万の富を築いた。十年程してその道士がまた飄然として来たので、主人は感謝して旧の如く酒を供応した。しばらくして道士が笛を吹くと天から白雲が下り、黄鶴にまたがった道士は白雲とともに天上に上っていったという伝説がある。黄鶴楼はそれに由来している。

佐藤幸夫教授と私とが、同志社大学と武漢大学との学術交流協定に基づいて、武漢

に着いたのは九月六日の夕方であった。残暑が厳しくこの日は四十度を超えていたと大学関係者はいつていたが、それから暑い日が続いている。重慶、長沙とともに武漢は「三大窯」といわれているのだ。

武漢は長江の中流に位置し、武漢三鎮といわれているように、漢水をはさんで漢口と漢陽が、さらに長江の対岸の武昌と合して、人口五百万の大都市を形成しているのである。昔から「武漢は九省に通ず」といわれているが、文字通り水陸交通の要衝でもあった。

そして九月十四日、武漢に来て一週間余りが過ぎた今日、私たちは黄鶴楼に登っているのである。武漢に着いた翌日に一度、黄鶴楼には来ていたのだが、何か会議があるとかで登ることができなかった。その時は漢陽にある帰元寺を訪ねた。古刹だそうだが、私はそれほどの感銘を受けなかった。有名な五百羅漢は圧倒的な量であったが、時間を気にしていたために足早に観ただけで、印象に残っていない。今、黄鶴楼に登り、長江を見下ろし、武漢の街並みを一望して、ようやく中国に来たという実

感が湧いてくる。

古くから黄鶴楼は詩にうたわれてきた。

手許にある黄鶴楼公園管理処編『黄鶴楼詩詞選』（湖北人民出版社）には百首余りが収められている。多くは惜別と流離の詩だ。

しかし現在の黄鶴楼はラジカセを手にし、小型カメラを肩にした男女や家族連れが、ひっきりなしに上下している。むろん私たちもその群れのなかにいるのであって、異郷での感傷にひたろうにもひたれる雰囲気ではない。肩をたたかれたのでふりむくと、若い二人連れの女性からカメラのシャッターを押せと頼まれた。

ここから武漢大学の象徴でもある旧図書館の風格ある建物が小さく見える。武漢大学は武昌の街の東方にある。珞珈山の麓、東湖の畔のなだらかな丘陵のうえに瑠璃色の屋根瓦が散在する美しい総合大学である。武昌は大学と政庁の街だ。武漢大学の概略については、新島基金で留学してきた李国勝君が、すでに本誌七十七号で紹介している、それにゆずろう。

佐藤教授と私の講義は、九月十日火曜日の午前から始まった。週三回の講義であ

る。佐藤教授は法学系の学舎で海商法と保除法を、私は外文系の学舎で日本近代文学を、ほぼ同じ時間に講義ができるように大学の方で配慮してくれた。午前九時過ぎに迎えるトヨベット・クラウンがやってくる。講義は九時三十分から十一時三十分まで、私の場合、その間約十分の休みをとることにした。講義が終れば迎える時の車で宿舎に帰って昼食をとる。午後の時は二時過ぎに車がくる。二時三十分から四時三十分まで講義である。

午前十一時三十分から午後二時三十分までの昼食は午睡の時間をふくんでいる。中国は何処でもそうなのだが、大学も同様だ。だから昼近くなると、昼食と午睡のために帰宅する人で雑踏する。

武漢大学は広大なキャンパスのなかに、学生、教職員の宿舎が建っている。これは向かいの华中師範大学でも同じである。だから早朝にはキャンパスの教職員宿舎の前で朝市がたつ。昼食時は街の中と同じように宿舎に帰る学生や教職員でちよっとしたラッシュになり、午後二時過ぎには再び教室や職場に帰る人々で構内の道路は人で埋

まる。そのなかを自動車はクラクションを鳴らしっぱなしで走っていくのだ。

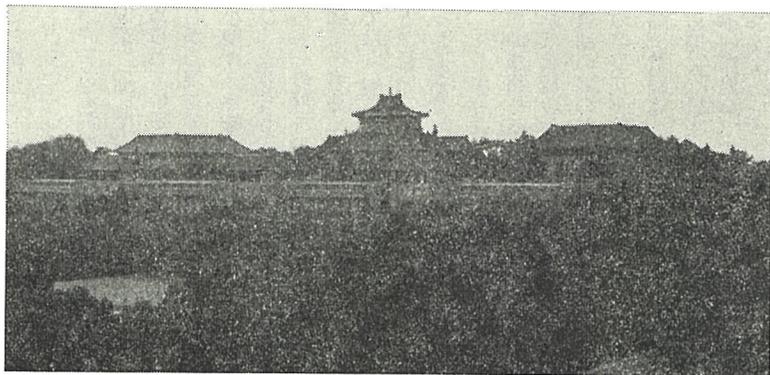
学生はよく勉強をしている。樹木の多いキャンパスのあちこちで、木陰を利用しながら読書したりノートをとったりしている。日本ではもう見られない風景である。午後の講義が終るとスポーツに興じる学生もいて、楽しそうである。

新学期が始まったといっても開講してい



武漢大学旧図書館

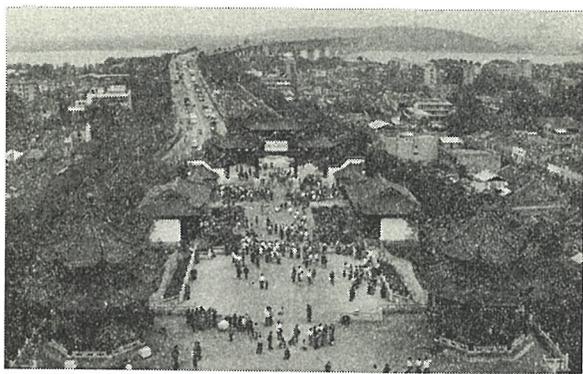
るのは二・三年生だけであり、大学院と新入生は九月十六日からだそうである。黄鶴



武漢大学遠景

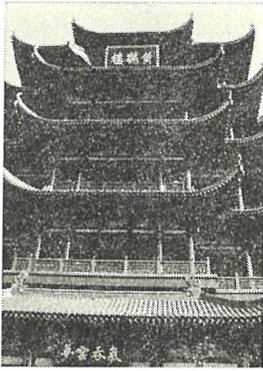
楼にいく途中で何台かのトラックとすれ違った。トラックには大きな荷物を持った青年たちが思い思いの姿で乗っていた。中国にいる間、私につきそってくれた武漢大学の研究生余炳跃君の説明によると、全国から集まってきた新入生だそうである。武昌駅に降りた彼等は、迎えにきた大学のトラックで宿舍に向かうところなのである。

彼等が向かう武漢大学や華中師範大学をはじめ二十余りの大学の門や建物には、新同学（新入生）への熱烈歓迎のデコレーションが華やかに飾られている。この頃から、一見して新入生だとわかる学生をキャンパスで見かけるようになった。なかにはまだ子供供した学生もいる。それと同時に、新入生歓迎のサークル紹介や日用品を売る露店が並び、そこには沢山の人が集まってくる。ラジカセの音量を一杯にして音楽が流れる側で、先輩が後輩に熱心に話しかけている。日本の新学期風景と変らない。これは私にも馴染深い。ただ全寮制のため露店で売っているものが、食器や椅子、タオル、石鹸というような日常雑貨が多く、そのあたりが少し違うといえるだろうか。



黄鶴楼より長江を望む

昨夜は映画会があったと余炳跃君がいていた。彼も恋人と観にいったそうである。二本のうち一本は日本映画だったが、話を聞いていてもそれがどんな映画なのか私には見当がつかなかった。土曜日と日曜日の晩、大学の野外音楽堂のようなところで映画会が毎週催されるようだ。暗くなり



黄鶴樓仰観

かける頃、学生たちが小さな腰掛けを持って会場に行く姿を見かけたことがある。はじめはあんな腰掛けを持って何処に行くのだろうと不思議に思ったが、あれは映画を観に行くところだったのだ。中国では今でも山口百恵は圧倒的な人気である。映画雑誌『大衆電影』九月号の裏表紙は山口百恵であったし、キャンパスの露店でも山口百恵のプロマイドやハンカチーフが売られていた。余君は百恵さんは内向的な感じがするという。わかるような気がした。私もここで山口百恵のプロマイドとハンカチーフを買ったが、日本では思いもなかったことだ。では男らしい俳優はといえば、それは高倉健だそうである。

余炳跃君が宿舎に私を訪ねてきたことが

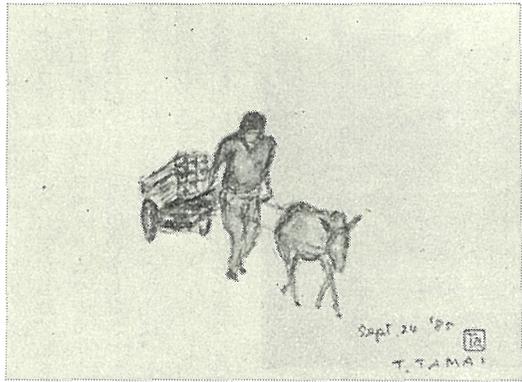
ある。そのとき、私はテープでイブ・モントンのシャンソンを聴いていた。私はモントンが好きだから日本からこれだけを持ってきた。それで若い友人に「シャンソンなんか持っていったら、ホームシックにかかりませんか」とひやかされたくらいである。しばらくして余君は、「これは日本の歌ではありませんね」と私に聞いた。「これはシャンソンというものだ。いいだろう」と私はいったが、余君はまったく関心を示さず、机にむかって何か仕事をしている。テープの最後は“Bella Ciao”であった。モントンの説明によるとこれはイタリア・パルチザンの歌であり、それをモントンはイタリア語で歌う。モントンが歌いだしたとき、余君は突然、「先生、この歌は僕も知っています。中国の若者の好きな歌です。啊、朋友再見、といえます」といった。私は中国語で知りたいと思ったが、余君もはっきりおぼえていないらしい。友人に聞いておきますと、いってくれたのだが、とうとうそのままになってしまった。心残りのひとつである。

佐藤教授や私の講義は順調に捗って



朝市風景

る。残暑はあいかわらず厳しい。ある日、学生から「今日は涼しいですね」といわれたことがあったが、その時でも水銀柱は三十五度に達していた。長江に面して、湿度も多く蒸し暑いから、じっとしていても汗ばんでくる。こういう時は、昼食と夕食にだしてくれる青島啤酒(ビール)がうれしかった。しかし宿舎のクーラーは猛獣のような音がして物凄く、とくに三階の佐



街路寸描

藤さんの部屋のクーラーは、電圧が下がりだすと、突然、ボタンボタンと心臓を震えさすような大きな振動を起して止まる。それが階下の私のところにまで響いてくるのだ。こんななかを佐藤さんは明方近くまで、あらかじめ学生に手渡す講義の草稿や、通訳への法概念の説明書を作っていたのである。

九月も半ばを過ぎたある夜半、稲妻が走

り雷が鳴り雨が激しく降った。それからというものの、昨日までの残暑が嘘のような涼しい朝を迎えるようになる。もう寒暖計は二十五度を超えることはない。一夜にして十度は下がったのだ。そうなると専家楼の外人教師たちは、気温の変化に敏感らしく、昨日までの夏姿とほうって違って、分厚い毛糸のセーターを着て食堂に集まってくのである。私も長袖のスポーツシャツの用意をすることにしたけれど、佐藤さんはまだ半袖シャツのまま。九月中旬に、厚い毛糸のセーターでは私たちの季節感にあわないのである。街もキャンパスも紺やグレイの中山服姿が多くなってくる。秋は突然にやってきた。

佐藤さんが武漢を離れる日が近づいてきたので、東湖をドライブすることになった。東湖は日語文系の隋玉林教授の言葉によれば、杭州の西湖に匹敵する、いやそれよりも美しいと武漢の人たちが誇りにしている湖だそうである。武漢に着いて私たちが直ちに訪ねたところも、実はこの東湖であった。九月七日、磨山の朱碑亭から見た東湖は素晴らしく、湖を縦断するように

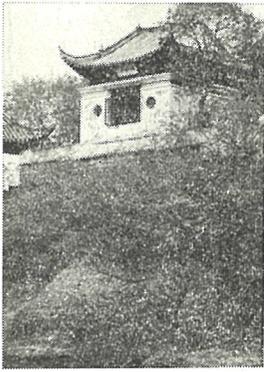
延びている築堤も美しかった。朱碑亭には大勢の観光客がいて眼下にひろがる東湖を眺めていたが、そのうち一人の青年から「コンニチワ」とたどたどしい日本語で話しかけられた。青年は友達と一緒に遊びにきていて、私たちを見て話しかけてきたのである。去年の十一月から日本語を勉強しだしたこと、流体力学を専攻していて来月には京都大学に留学することになっていることなどを、うれしそうに話していた。再会を約して別れたが、今その青年は、京都のどの辺りにいるだろうか。

それが十日ばかり前のことであった。しかし、今、再び訪ねてきて車窓から見る東湖は、すでにして蕭条とした風景を呈している。築堤の杉並木を自動車は走っているのだが、散策する人影はなく、牛車を僅かに見かけただけだ。秋の気配は濃厚であった。そうしてはじめて気がついたのだが、対岸に鉄鋼コンビナートの工場と煙突が影絵のように望見できるのだ。この美しい東湖も年々汚染されていると聞いたように思う。

涼しくなってきたからの武漢は曇り空か雨の

日が続いていて、澄みわたった秋色は望むべくもない。佐藤さんが北京・西安にむけて発ってから、もう一週間が過ぎた。九月も終りに近づいた頃、私が大学院で教えた于耀明君が夫人の張応華さん、四歳になる子供の翔君を連れて、国慶節の休みを利用して、はるばると西安から私を訪ねてきてくれた。うれしかった。久し振りに見る于君は元気であった。

三日間程、于君の家族と過すことができたが、そのうちの一日を蘇東坡の「赤壁賦」で有名な東坡赤壁へ行くことにした。武漢の東方約九十料、長江の下流に位置する。自動車で約二時間、長江に沿いながら農村地帯を走って鄂城という町についた。そこから対岸の黄冈まで長江を船で渡るの



東坡赤壁

である。すぐ眼の前を流れる長江は予想外の急流であった。小さな木片があつという間に流れていった。あの木片は何処から流れてきたのだろうか、何時海にそそぐことになるのだろうか。一滴の水からこんな大河になるのには、どれだけの時空間を経なければならぬのだろうか。視界から遠ざかりゆく木片を見つめながら、過去・現在・未来の時空間について、私は柄にもなく哲学的になっていった。「逝ク者ハ斯ノ如キカ、昼夜ヲ舎カズ」という言葉が思わず浮んでくる。私はこの茫然たる長江に圧倒されていたのである。

東坡赤壁は洪水による土砂で埋められたため長江との間がせき止められ、「前赤壁賦」の「白露江二横タハリ、水光天二接ス」という壮麗な光景は、残念ながらもう見られない。小堂宇が幾つかあり、そこに東坡の墨跡の複製が展示されていたことで、僅かに慰められたといえるだろうか。崖下は池のようになっていて、人々はそこでボートを楽しんでいた。さながら小遊園地である。

武昌の大学附近は市街のはずれになるか

ら人通りも少ない。その道を荷車を曳いて驢馬が通る。驢馬は何時見ても哀しげだ。秋雨にうたれている驢馬の姿が、私の帰心をかきたてる。

九月二十九日は中秋節である。余炳跃君は今夜恋人をつれて黄鹤楼近くの両親の家に帰っている。旅先にある于耀明君の家族も月餅やお菓子や果物を奇麗に飾りたてて夜を迎えた。中国の人たちはこの日を大切にしているのである。「異郷にある人は、故国を偲ぶ日ですが、先生はいかがですか」と于君はいう。すると于夫人が「先生、于さんが日本にいる間、私は何時も東の空を見ていました」と私にいった。宿舎の外では爆竹がなっている。あいにく雲にさえぎられて月は見えない。

このころになると武漢大学や華中師範大学のキャンパスには桂花(金木犀)が咲きはじめ、芳香で満たされる。日本のものより花の色も匂いも少し淡いようだ。私の家の金木犀はもう咲いているだろうか。

そして私の武漢を離れる日も近づいてきた。